

第1回

# 掛川考古展 「城」

-高天神城・横須賀城・掛川城-



平成17年10月22日(土)~11月13日(日)

大日本報徳社淡山翁記念報徳図書館

とぎ  
ところ



## ◆高天神城

高天神城跡は、掛川市土方・下土方地区に所在する中世の山城です。

城は、小笠山から延びる丘陵の先端を利用して作られていて、一方が尾根続きで三方が断崖絶壁という天然の要害です。東西の峰の主郭的な平坦地を中心として、各曲輪を取り巻くように配置され、東西の峰が尾根で連結している「一城別郭式」と呼ばれる構造です。

築城の年代は定かではありませんが、古文書などから、室町時代に遠江を領有していた今川氏の支城であったことが確認されています。

今川氏の家臣であった小笠原長忠が城主になりましたが、桶狭間の戦によって今川氏の勢力が急速に衰退すると、長忠は徳川家康の誘いにのり徳川氏に属するようになりました。

元亀2年（1571）武田信玄は、遠江に侵攻し、高天神城を2万の軍勢で取り囲みました。城主長忠は、籠城して城を死守したので、城は容易に落ちませんでした。信玄は、城攻めをあきらめ、家臣を高天神城の押さえとして残して自らは三河に進軍しました。これが、「信玄でも落とせなかつた難攻不落の城」として高天神城有名になりました。

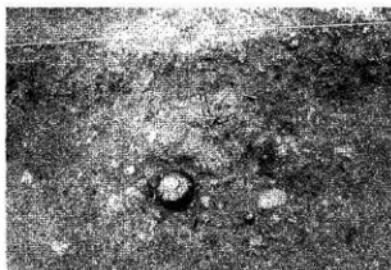
信玄の死後、武田勝頼が、天正2年（1574）に2万とも2万5千ともいわれる大軍を率いて遠江に侵攻し、高天神城を取り囲みました。長忠は、籠城して城を守るとともに、浜松城に使いを出して家康に援軍を要請しました。しかし、頼りにした援軍ではなく、城兵は武田軍の攻撃に耐える力もなくなり、勝頼からの和睦を受け入れ、開城に応じてしまいました。高天神城を手に入れた勝頼は、自分の家臣を城主にしました。

家康は、勝頼に奪い取られた高天神城を奪還するために、周囲に六つの砦を築き、包囲網を狭めていきました。

籠城している武田方の兵は、兵糧弾薬も尽き、甲斐からの援軍もなく、いよいよ総攻撃の決意を固めました。天正9年（1581）3月、



本丸 穂敷の掘立柱式倉庫検出状況



堂の尾曲輪 天目茶碗出土状況



二の丸西下 試堀検出状況

城兵は、徳川方の本陣に向かって打って出て全員討ち死にしました。高天神城は落城し、家康はすべてを焼き払い廃城としました。「高天神を制す者は遠州を制す」と言われた高天神をめぐる戦いは、徳川の勝利で終わりました。

平成10年度から史跡整備の一環として、堂の尾曲輪、二の丸、本丸の順で発掘調査を実施しています。発掘調査により、縄張図に描かれていない遺構が発見されています。二の丸の調査では、三段に築造された曲輪の最上段に物見櫓的な建物、中段に掘立柱建物、下段に礎石建物が存在していたことがわかりました。袖曲輪と堂の尾曲輪を分断する堀切からは、木の橋が架けられていたことを示す橋脚をえるためのピット（柱穴）が発見されました。また、袖曲輪の西端部の上段上から横列と思われるピット列や、門の跡と考えられるピット群なども発見されました。このほかにも、通行を遮るために造られた塀や畠（土手）などの存在も明らかになりました。当時は、現在の姿よりも土壘は高く、堀は深く広く掘られていて、厳重な防御であったことがわかりました。さらに本丸の調査では、掘立柱建物の床面に砾を敷き詰めたものが発見され、次の時期に礎石建物に建て替えていることが判明しました。どちらの建物も倉庫であったと考えています。

遺物は、天目茶碗、茶入、土鍋、すり鉢など生活に関連するものが多量に発見されています。そのほかに、中国華南三彩と思われる香が、染付などの輸入陶磁器、梅瓶、錢貨などもあります。また、鉄砲玉、鎧の小札、陣笠の塗膜などの武器・武具の類も発見されています。

発見された遺物は、15世紀後半、16世紀中ごろから後半、の大きく二つの時期に分けることができます。



堂の尾～井接曲輪沿い 横堀西の土壠検査状況



二の丸 羽釜出土状況



堂の尾～袖曲輪間の堀切 橋脚ピット検出状況  
(手前が畠と堀)

## ◆横須賀城

今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれると、今川氏の勢力は急速に衰え、この地域の支配をめぐって、武田氏と徳川氏が攻防をくり広げるようになりました。天正2年(1574)、高天神城が武田方に落ちると、徳川家康は高天神城攻略の拠点を築くことにしました。横須賀城は、高天神城を奪還する拠点として、天正8年(1580)、徳川家康の命を受けた大須賀康高によって築かれ、康高が初代城主となりました。天正9年(1581)、高天神城は落城とともに廃城となり、横須賀城が遠江東南部を支配する拠点となりました。

天正18年(1590)、徳川家康の関東移封に伴い、2代城主大須賀忠政は、上総国(千葉県)久留里城に移封されました。代わって、豊臣系の渡瀬氏、有馬氏が城主となりました。慶長6年(1601)松平(大須賀)忠政が、久留里から戻り5代城主となりました。その後、近世を通じ、標高2万5千石から5万5千石の譜代大名の居城となりました。松平(能見)氏、井上氏、本多氏、西尾氏と続き、明治維新の廃城まで、288年20代の城主を数えました。

築城当時、城は小笠山から延びる丘陵尾根を利用して造られていて、南側から北側にかけて大きな入江と湿地があり、要害の地でした。入江には港があり、海岸を通る道も城前を通っていました。このように横須賀城は、海陸交通の結節点、物流の拠点に位置していました。つまり、平野の東に笠を伏せたように横たわる小笠山をはさんで、北側の東海道を掛川城で押さえ、南側の海沿いのルートを横須賀城で押さえていたと考えられます。

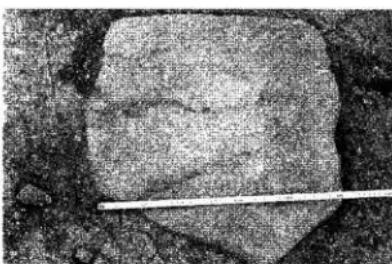
横須賀城は、小笠山の尾根と、そこから西に延びる砂州を利用した東西に長い城で、東西に618m、南北は三の丸部分で289m、二の丸部分で184mを測り、標高は、最東端の松尾山が26m、天守台部分で23m、二の丸部分で5mを測ります。面積は、全体で168,419m<sup>2</sup>



西の丸西側斜面 登坂路の石段と門跡検出状況



西の丸西側斜面 登坂路の門跡石敷検出状況



天守台 磨石と柱痕跡検出状況

あります。

城は、外堀と城内に配置された池によつて、大きく三分されます。16世紀末に山城として築かれた中央の本丸、17世紀に平城として拡張して付け加えられた東側の三の丸、西側の二の丸です。本丸はさらに、天守台や西の丸などがあった本丸と、北の丸御殿や倉庫などがあった北の丸に分けられます。

北の丸の東にある松尾山の東側には、幅30m、深さ15mの空堀があります。この空堀は、尾根を分断することにより、東側からの敵の進入を遮断していました。

三の丸は、城下町に隣接し、藩政を行う藩庁があった場所と言われています。

二の丸は、城主の住居空間である東部分、武器蔵と考えられる中央部分、厩と馬場があった西側部分の三つの部分に分かれています。

城の出入り口は、三の丸部分に東大手門、二の丸部分に西大手門と搦手門がありました。搦手門は、城中で不幸があった時だけ開けられて遺骸が運びだされたことから、不開門とも呼ばれました。

正門である東大手門に隣接して二重の太鼓櫓、西大手門に付属して二重の西櫓が配置されていました。

横須賀城跡では、昭和59年度から史跡整備のための発掘調査が、本丸を中心に行われてきました。そのほかに、住宅建設等に伴い発掘調査が実施されています。

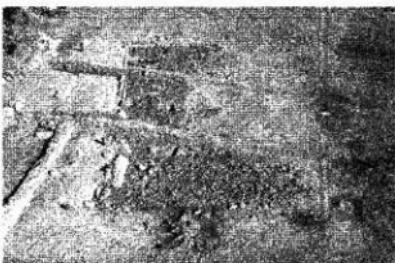
西の丸跡の西側斜面から、登坂路にあった櫓門と考えられる門の跡と、それに付属する螺旋状の石段が発見されました。門の跡は、扁平な円形の石を敷き詰めて造られていて、四隅に親柱と控柱の礎石と考えられる石がすべてありました。親柱の二つの礎石は、中心間で幅2.6mを測ります。この門の跡の東には、長さ1.4mから2.9mの石列が扇を広げたようにすえられていて、螺旋状の階段が作られていました。これは、敵の直進を妨げるた



天守台 南東隅入口状部分検出状況



天守台 鳥瓦尾部分出土状況



三日月池北側中段 玉砂利敷建物跡検出状況

めにわざと螺旋状にしたのです。

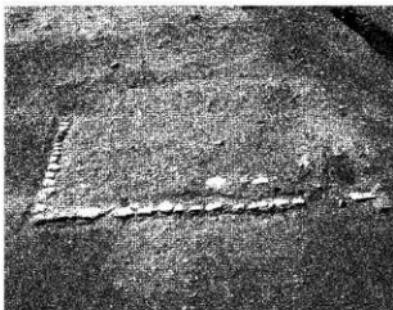
天守台からは、天守閣の跡と考えられる礎石群が発見されました。8個の礎石と19個所の礎石の跡が、約2mの間隔をおいて東西6間、南北3間半の基盤<sup>クイセイ</sup>目状に並んでいました。礎石の一つには柱の痕跡が残っていて、一辺30cmの角柱が使われていたことが分かりました。礎石群の北半分は削られていたので、残念ながら全体の規模は分かりませんでした。天守台の南側と西側からは、復元すると高さ1.2mになる鰐瓦<sup>テラガタ</sup>が発見されました。

松尾山の東縁部の基壇（建物の上台）上から、建物跡の礎石と石列が見つかりました。建物は、倉庫跡と考えられ、南北17m、東西4mの規模が想定されます。南北方向の中央部分にT字形の石列が存在することから、中央に間仕切りのための壁があったのではないかと考えられます。

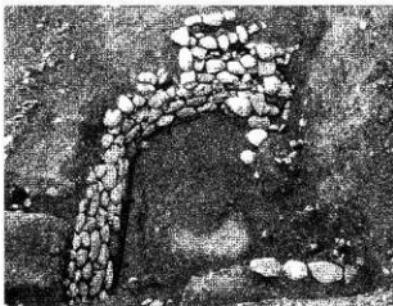
北の丸跡の中央から、建物の地覆石（壁の上台石）か基壇の縁石と考えられる、直角に折れ曲がる石列が見つかりました。東西列5m、南北列2.5mが残っていて、建物の北東角部分に相当すると考えられます。

二の丸跡の東端部分から、御殿の池の南端部分と考えられる、石積護岸を施した池跡が見つかりました。護岸の石垣が沈下するのを防ぐために、石の下に角材が敷かれています。この角材が、池に張り出すことによって石垣が崩れるのを防ぐために、杭を約1m間隔で打って角材は固定されていました。護岸の石垣は、5段が残っていました。

横須賀城からは、建物に使われていた平瓦、丸瓦などの瓦が多量に発見されています。特殊なものとしては、鰐瓦や鬼瓦、大きな埴瓦などがあります。また、製作された年月、製作者の名前が記されたもの、顔や文章がいたずら書きされたおもしろい瓦もあります。そのほか、九州、東海地方で作られた18世紀から19世紀を中心とした時期の陶磁器製品が多く発見されています。



北の丸 建物跡検出状況



二の丸 池跡検出状況



二の丸 池跡石垣の状況

## ◆掛川城

戦国時代の明応・文亀年間（1492～1503）ごろに今川氏の重臣である朝比奈氏が、現在龍華院のある場所に城を築きました。その後の永正10年（1513）ごろ、現在天守閣がある場所に新しく城を築きました。

天文18年（1590）、山内一豊が掛川城主になりました。一豊は、慶長5年（1600）に高知へ移るまでの間に、天守閣の築造や城域の拡張、城下町の整備などを行いました。

幕末の安政の地震（1854）により、天守閣、御殿、太鼓櫓などの建物、石垣が大きな被害を受けました。御殿と太鼓櫓は再建されましたか、天守閣は再建されないまま、明治2年（1869）魔城となりました。

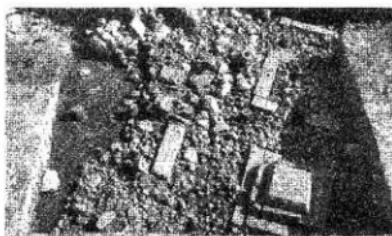
掛川城内の発掘調査は、昭和63年から始まった天守閣復元事業、土地区画整理事業、公共施設の建設などに伴い実施され、少しづつ往時の様子が明らかになってきました。

天守閣の石垣は、山内一豊による天守閣造営の時期と江戸時代に積み直されている部分があることがわかりました。天守丸からは、長径約1.55m、短径約1.2m、深さ約0.4mの穴が発見され、底の近くから16世紀後半に位置づけられる鬼瓦、ミニチュア羽釜、水滴、小皿などが発見されました。本丸から腰櫓を経て天守下門に至る登閣路は、自然石を使用していて、幅1.6mから2mほどありました。

本丸からは、東西1間（約1.1m）、南北5間（約4.8m）の礎石建物跡、東西1間（約1.1m）、南北2間（約1.6m）の掘立柱建物跡、トイレと考えられる穴などが発見されました。これらの遺構の下からは、12世紀後半から16世紀前半にかけて造られた墳墓群が発見されました。本丸門の前面からは、堀の水位を調節するための暗渠で結ばれた三日月堀・十露盤堀・内堀（松尾池）が発見されました。発見された遺物には、鉄砲玉、陶磁器、錢貨、鏡瓦の破片などがあります。



腰櫓付近 登閣路の階段検出状況



本丸 中世墳墓群検出状況



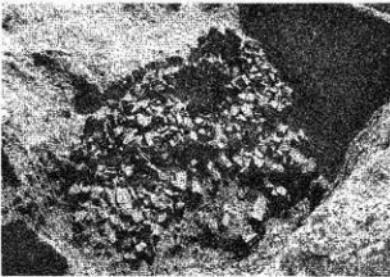
大手門と番所間の瓦敷き検出状況

大手門周辺の調査では、大手門の柱穴が発見され、柱穴間の距離から桁行約12.7m、棟間約5.5mの規模が推定されます。門の周辺からは、門に使用されていたと考えられる釘や鉄などが漆喰の破片とともに発見されました。大手門と番所、土塀の基礎が発見されたことにより、大手門の内側の構造が明らかになりました。発見された遺物は、陶磁器のほかに、鉄釘、鉢、座金などがあります。

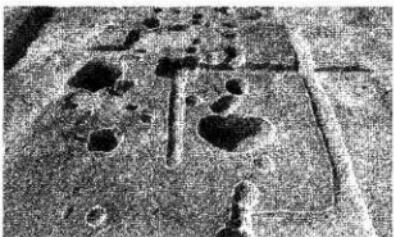
二の丸の調査では、御殿の台所跡の柱穴が発見されました。柱穴の配置は、安政年間(1854~59)に描かれた御殿の絵図と一致しています。また、天守・本丸を防衛するための空堀が発見されました。堀の規模は、深さ約4.5m、幅は推定で約10mあります。

山下郭は、当時武家屋敷があったところです。第一小学校のプール改築に伴う調査で、池状の遺構が確認されました。東西約7.4m、南北約3.4m、深さ約0.75mの規模で、第一小学校の南側の道路の下に及んでいます。そのほかに、無数の柱穴、井戸跡なども確認されています。市立中央図書館建設に伴う発掘調査では、掘立柱建物跡、井戸跡23などが確認されました。掘立柱建物跡は、中世から近世の時期のものがあると考えられます。

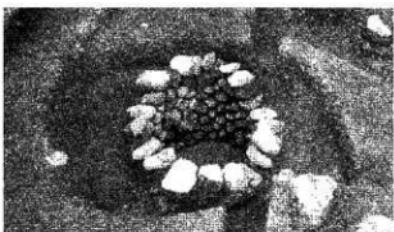
龍華院の調査では、明暦2年(1656)の龍華院の建立時期を遡る井戸が発見されました。また、龍華院大歓院靈屋の東側にある土星の調査では、現在残っている土星の規模が、幅6m以上、高さ2.1mと判明しました。従来、この土星は、掛川城が造られる前の掛川古城に伴うものと考えられてきました。この時の調査で、土星の下から16世紀中ごろに位置づけられる遺物が発見されたことから、土星は16世紀中ごろ以降のものと判明しました。空堀の調査では、上端の幅約15m、底面の幅2.8m、土星の上面からの深さ約10mの規模であるとわかりました。



二の丸 空堀内の瓦検出状況



山下郭 掘立柱建物検出状況



龍華院 右組み井戸検出状況

年表

開発予定地内に遺跡はありませんか？  
工事の計画前に確認してください。

掛川市内には現在694遺跡が確認されていて、県内でいちばん遺跡が多い市だといわれています。遺跡（埋蔵文化財）は、私たちの“心のふるさと”であり、後世の人たちに伝えていくことが大切です。

そのため、「文化財保護法」により、遺跡がある場所で土木工事や建築工事、茶園の改植などを行う場合には、事前に文化庁に届け出をすることが義務づけられています。

届け出をしないで工事を始めたところ、遺跡が見つかったため調査をすることになり、完成が遅れてしまった・・・ということがないように、工事を計画する場合には、早めに掛川市教育委員会にご相談ください。

なお、教育委員会・図書館には、市内にある遺跡の様子を示した「遺跡地図」がありますので、工事を計画する前に必ず確認してください。

---

掛川市教育委員会 教育文化課 文化財係  
電話 (0537) 21-1158



文化財愛護シンボルマーク